

13. 総括—歴史を学ぶとはどういうことか

2025. 7.21. 大橋 幸泰

0. 講義の趣旨

日本史を材料に歴史との向き合い方を学ぶ／それを前提に、近世・近代を概観
→歴史学は変化を考える学問／国家や社会のあり方、秩序・常識はそれぞれの時代で異なる
→私たちが拘束しているものは何か／私たちは何者か、を知る

1. 国民国家は解体すべきか？

国民国家／成員が均質で、国民としての一体感を持つ国家

→それが内包する問題

a.国民国家に属する人びとの個性を切り捨てる機能ももつ
＝均質な国民を前提としながら、現実の多様性を隠蔽

b.国民国家の外の人びととの間に利害の対立をうむ

* (国民国家に限らず) 帰属意識の形成／集団の一体感を生む一方で、そこからこぼれる者への差異化(差別化)の起点

では、国民国家は解体すべきか？

→現状では困難な面が多い／もし国民国家が解体したら、別の問題が浮上

* 現実には、国民国家の枠組みによって、私たちの権利が保障されている(憲法・法律、など)

→では、どうすればいい？

* 当面、まずは国民国家が歴史的産物であることと、その矛盾の存在を自覚することが必要／同時に、他のすべて枠組みの矛盾も自覚すべき

2. 歴史の役割はだれか？

歴史を動かす原動力／社会構造・支配秩序の矛盾と、それに違和感や不満を感じる生活者の告発

* ただし、ドラスティックな「革命」は多くの犠牲者を出す、というのが歴史の教訓

→生活者の声を世の中にどのように反映させるか／民主政にいかん民本徳治の精神を込めるか

おわりに—講義を締めくくるにあたって

1970 年代黒羽清隆氏の授業を受けた、ある高校生の感想

「(歴) として存在しながら(史) となり得なかった人々の生を求め、かれらの生を確認することが、かれらへの敬意と愛のかたちであると思う」

* 「歴」＝過去に起こったことすべて、「史」＝その記録、「生」＝人々が生きた証・生活

→歴史的に形成された枠組を越えて、生活者の喜怒哀楽に思いをはせることこそ、歴史と向き合う大事な姿勢

【参考文献】

黒羽清隆『増補版 日本史教育の理論と方法』地歴社、1975 年)

『網野善彦著作集』全 19 巻(岩波書店、2007-09 年)

『鹿野政直思想史論集』全 7 巻(岩波書店、2007-08 年)

『安丸良夫集』全 6 巻(岩波書店、2013 年)

【付記】

- ・明日までに、Waseda Moodle にて講義記録の提出を求める。／今回は本日の総括と議論をふまえて、この講義全体を通じて考えたことを書いてください。
- ・小レポートを提出した者が試験(7月28日)の受験資格を有する。

